令和４年度　第５回南アルプスIC周辺高度活用計画検討委員会
議事録（要旨）

日　時	令和５年１月23日（月） 14：00～15：45	場 所	市役所本庁３階 大会議室
出席者	委　員：佐藤文昭委員長、大山勲副委員長、佐々木邦明委員、坂口裕昭委員、小池直己委員、花輪進委員、野田清紀委員、中込卓也委員、齊藤陽一委員、手塚美砂子委員、村松廣義委員、名取春樹委員、佐藤寛委員、中辻伸委員、横山瑞法委員 事務局：南アルプス市総合政策部　櫻本竜哉部長 南アルプスIC新産業拠点整備室　野田剛理事、中込光司主幹、金丸周平主査 山梨総合研究所：廣瀬友幸主任研究員		

次第

1　開会
2　委員長あいさつ
3　議　事
（１）高度活用の考え方（目指すべきビジョン）について
（２）高度活用推進計画について
7　閉会

＜以下、議事録＞（議長：佐藤委員長）

議題（１）高度活用の考え方（目指すべきビジョン）について

事務局より資料「第５回 南アルプスIC周辺高度活用計画検討委員会資料」にて説明。

【各委員の主な意見】

・実際に長く居住している方、また、U・Iターン、移住して来た方がこのまちに何を期待して来たかが議論の中心になる。本地区の土地利用は、本委員会で決定するのではなく、総花的な話であるため、その方々の経験を活かして、様々な立場からペルソナに漏れている視点・想いがあるかなどを議論できるといい。それらを本計画に落とし込み、今後、例えばエリアマネジメントの手法によって、民間も観光、教育環境等について、みんなで具体策に落とし、具体的なテーマや尖った計画が出てくるような土台を作る委員会だと理解した。

・上位計画や市の政策、シティプロモーション、本委員会、市民ワークショップの内容が反映されているという説明だが、計画はその真逆でないか。目指すべきビジョンとして職住近接とあるが、少なくともシティプロモーションには記載されておらず、むしろリモートワークやリニア開通、食の多様化を上手く捉えていくという位置づけである。
なぜ、南アルプスライフスタイルの中心に参入企業があるのか、未来は参入企業から始まるのか。市民やコミュニティが中心あり、行政、民間、産官学が支援して未来を作っていくという絵が理想である。

・ライフスタイルに参入企業が中心にあるイメージは修正可能だと思う。P.16 エリアマネジメントでは参入企業が中心ではなく、この組織にみんなで関わっていくイメージになると理解している。
・多様な働き方の拒絶や、職住近接の優先をするのでないはず。キーワードの説明がない中で、見る人がどのようにキーワードを捉えるのかという観点で資料を作る必要がある。
また、ペルソナの設定として、都会的で暮らしやすい、育休を取得するのは女性、低給料を嘆きつつ心の豊かさ求めている、などは、我々が望んでいる人物像や未来であるのか違和感がある。
・ペルソナとして、次世代を担う学生や、ゆっくり過ごせるリタイア層といった視点も必要である。幅広く年齢のことを監がることにより、総合的に市が発展していける。
・参入企業の多様な仕事に地元の若者たちが触れる機会があるといい。東京と地方の子ども達では触れるものには差がある。シェアオフィスやワーキングスペースを作るのであれば、子ども、学生、地元の若者に開かれた利用しやすい場所になるといい。
・高校卒業後の県外流出を問題視していたが、ここ 3 年ほどは変わってくるかもしれない。最近、学生が地域の企業や行政と一緒にイベント企画等をすることが増加している。UR では、学生に、高齢者との触れ合いや子育て体験など、社会の問題に直接関われる場を作っており、学生の意識が変わっているという。エリアマネジメント組織にも学生が関わると面白くなる。ペルソナに農業を継ぐ若い人たちや、参入企業で働くために移住する人も想像しなければならない。移住しなくとも、交流をする方のイメージもしてはどうか。
・ライフスタイルや参入企業も含めて考えると、人材の確保が大変だということが 1 つある。やはり先に人がある。このようなライフスタイルで住みたい、働きたいと思う人が多いと企業も参入しやすく、このような取り組みに参加できることをメッセージとして、記載したい。農業と食の話を繋げるなど、食べ物の良さをアピールできるといい。
多様な人がつながるコミュニティの解釈について、世代間や地域内・外、大学生など具体的に考えてほしい。コミュニティづくりはぜひ強く打ち出していただきたい。
・U ターンの理由として、食の魅力がある。私自身が山梨に行きたい大学がなく、県外に出たきっかけがあるため、山梨で学びたいものがあれば、そこはプッシュできるようにしたい。以前、東京で子育てしており辛い経験をした。東京にいるには理由が必要であるが、山梨であれば、働き方や稼ぎ方、生活の仕方が自由であることが魅力である。東京に比べ低給料だが、それを求めて帰郷していない。人が少ないからこそサポートしてくれる人が沢山いる良さもある。
会社を設立しており、若者や共に働きたい人と出会うのが大変であり、その方々に出会える場があるといい。
・高齢になると不安なのが、空き家や耕作放棄地である。それら好循環させる仕組みがあるといい。一定年齢になると、若い人はそれらを買い取ってリメイクし、住人介護施設に入所する仕組みがあり、将来安心して暮らせると聞いたことがある。
生活すると必ずごみが出る。将来ごみの引き取り手が少なくなる可能性もあるため、自分たちで処理を行っていくことや、ごみの減量も考える必要がある。

・道路が何年度中に整備されるのか、企業誘致のために周知すべき。この案は何年先に叶うのかわからないため、先にインフラを整備すべき。
・参入企業に本委員会の検討資料を渡すのでなく、その前段階の整理という理解で良いか。本委員会の報告書が出来た後のスケジュールを示してほしい。
・参入企業は、大規模小売店や工場、流通倉庫だけではない。現在、国全体としてもこれらは皆に幸せをもたらしたかと反省している節もある。対象と関わり方という 2 つの側面からまちづくりが多様化している。対象の例として、大規模小売やモールだけでなく、学校、教育機関、新エネルギーの開発拠点、福祉医療施設、あるいはデジタルソリューションの提供など、日々の暮らしに直接関わる形での参入もある。関わり方の例として、以前、大規模工場・工場の村ができ、大量に雇用が生まれたが、賃金も安く、生産性が高まらないうちに老朽化が進み、撤退となり、何も残らなかったということが起きたのも事実としてある。しかし、現在、参入企業もライトにサテライトオフィスを設置し、地元の暮らしに合わせる形で参入していく形や、足りなかったものをサポートする形など相互に行き来するような参入もある。加えて、住民の暮らしに融合していく、地域が主役になっている中に入っていくパターンの参入もある。
職住近接も一緒で、オンとオフや、生産と消費を明確に区分し、それぞれのプレイヤーを決めてその世界を閉じ込める時代ではない。働き方として、リモートワーク等新しい生活が浸透してきている中、循環型社会を作り出していくベースと考えると納得がいく。

議題（2）高度活用推進計画について
事務局より資料「第 5 回 南アルプス IC 周辺高度活用計画検討委員会資料」にて説明。
【各委員の主な意見】
・土地利用をエリア切り分けるとの話だが、多少重なるところがある使い方がいい。その理由は、ミックスド・ユースの方が良いという部分と、生活が徒歩圏内できるといい。そう考えると、中部横断道と新環状道路が妨げになることから、それぞれのエリアをどう使い分けるかが重要な課題となる。また、新産業拠点の交通拠点や地域交流拠点と、本地区からやや遠い生活関連ゾーンをどのように繋げるかも検討いただきたい。
・P.10 職住近接を中心にしながらも、多様な生活ができることを記載していただきたい。職住近接は、P.13～15 において、この地域を産業・交流と住むという二つで構成するための建付けであると理解した。
P.10 期待される取組みについて、大事なのは経済と環境が両輪であること。例えば、東京だと、大企業は小さなサテライトオフィスを沢山作り、様々な企業と交流しながら新しいものを生み出している。それをあえて本地区でしたくなる魅力をどう作るかがポイントであり、環境とのマッチングが重要である。地域から見ると、太陽光パネルの下に農地があり破壊されている。そこのバランスのとり方が課題であり、バランスを取るような企業に来てほしい。それを支えるのが人である。
P.10 と P.13 以降の内容の繋がりを具体的に示してほしい。例えば、目指すべき社会を実現するにはどのような住環境モデルなのか。経済として、どのような参入企業や人、社会、人材

育成なのか。また、本地区の開発により地域に波及されるソフトのことも記載すべき。
P.12 言いたいことは、住と職・交流の二つであるが、加えて都市空間の整備とあるのは、質を高めるということ。
P.13 交通結節点であり、既成市街地に隣接しており、好立地であることを記載すべきである。
P.14,15 ゾーン分けは決まったものでなく、柔軟的である必要があることをより強調すべき。無秩序かつ地域の風土を乱す開発を防止するために、市の政策としてスピーディー対応すべきである。
P.16 エリアマネジメントが一番重要なところ。参入企業との連携の仕方や、地域全体にどうアピールするか、進め方や取り組む内容の例を書ければいい。
今後の展開も記載する必要がある。リニア開通がデッドラインとなる。開通の 1、2 年後あたりに開発圧力がどんどん高まる。それを逆算すると、タイトなスケジュールになる。
本計画に賛同が得られて、市がこの事業の組織形成し、予算をつける流れにしていただきたい。そのためにも、市がすべきことが散りばめられている工夫が大事である。

・全国 47 都道府県に行ったことがあり、移住したいと思った場所の共通点として、P.10 社会・経済・環境・人・関係のうち、私は人・関係に価値基準を置いている。非常に心地よく、困難があったとしても助けてもらえるっていう絶対的な安心感がある。切り離して考えると、社会だけであれば、地元に住むか、あまり社会のことを考えなくていい東京に住む。経済だけであればお金がある東京に住む。環境は、日本中どこでも環境が素晴らしいので決められない。となると、人と関係性のところが重要であり、移住したいと思った場所は、エリアマネジメントが成功している。属人的な所でなく、人が行動化されており、人が変わっても続いている、受けられる環境である。 繋がりが強ければいいというよりは、このように潤滑する、しかも多種多様な人たちとうまく循環できるシステムが小さくともあれば住みやすくなる、住みたいと思う。
・参入企業との関係をペルソナの中に入れられるといい。そのような関係性がある人達の中で囲まれて生活していることを示してもいい。
・P.10「南アルプスライフスタイル」は、市民ワークショップの意見を踏まえて出来ていると考えているが、期待される取り組みを実現するには、自主財源の確保が必要である。そのためにも、南アルプス IC の開発を通じて地域ブランドを作り、いかに稼げるまちにするかを検討する必要がある。例えば、新産業拠点の新たなブランドとなるコストコで扱う海外産サクランボは地元のサクランボと競合することになるが、これを好機ととらえた農業施策を行ってほしい。居住区域も再生可能エネルギーを活用等しながら 2050 年のカーボンニュートラルに向けて地域ブランド化する必要がある。また、健康の問題については、非常に難しいと思うが、災害に強く交通の利便性を活かした重粒子治療の施設についても考えられる。
・このビジョンは 5 年も経たないうちに実現してしまうのではないかというスピードで社会が動いている。そうなるとリニアが開通しても駅に人が下りないことが心配されるほど（ビジョンが）平準化されてしまうのではないか。本計画には尖ったものが記載されていないが、山梨の交通の要所となる南アルプス IC 周辺が平準的なものでいいのかという想いがある。
・絶対にしてほしくないまちは、メイン通りに見たようなモールやファミレス、コンビニが並

んだまち。南アルプス市のブランドをどう育てるかが大事であり、今までは、参入企業のオーナーに従ってまちづくりをしていたがそれでは個性的なまちはできない。私たちがこういうまちづくりをするから、そこに「賛同」する企業は入ってきてくださいということが大事である。それは決して大企業ではなく、町工場の集合体でもよい。それが根付いていけば、大企業のように撤退することもない。

六次産業化の話として、一次から二次、二次から三次、三次から最終的に一次につながる SDGs のようなサイクルを構築するまちづくりの仕方もある。近接職住ができ、みんなが居心地の良いいまちになっていくと思う。この居心地の良さは、人との絆やコミュニティ、周辺環境に左右される。

道路等の開通により、山梨にいても 1 時間程度で海に行ける。田舎であるデメリットよりもメリットが大きくなってきている。このメリットをどのように周りに波及させ、人や産業などを呼び込んでいけるかが 1 つのポイントになる。

・歩行者だけの道の整備など歩いて行ける、安心して子ども歩かせられるウォーカブルなまちになるといい。道路整備によって、企業が参入するなど便益に見合う形の開発をしてもらいたい。何 10 年先も維持管理費用が掛かることも見越した計画を期待している。

・全国の IC 周辺には集約施設や大型商業施設があり、そこに住みたいと思うのは全国同様である。コストコが拠点になったとして、南アルプス市の特性である自然や農産物とどうしたら融合できるのかをビジョンとして示せれば、他自治体との差別化ができる。

その他

事務局：第 6 回の検討委員会を 3 月 2 日（木）の午後 2 時に開催する。　　以上